様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：１１１０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４７３０４１０

研究課題名（和文）戦後開拓地におけるコミュニティの形成と変容過程に関する社会学的研究

研究課題名（英文）A Sociological study on formation and transformation of community in Post-war Reclamation

研究代表者
高瀬　雅弘（TAKASE, MASAHIRO）

弘前大学・教育学部・准教授

研究者番号：２０４４７１１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、戦後開拓地におけるコミュニティの形成と変容をたどり、一連の過程を規定する諸要素をみいだそうとしたものである。具体的には、地域社会における協同関係の構築や対立・葛藤とその解決の方途、戦後開拓政策の受け止め、世代間の継承のあり方の分析を通して、自然村とは異なる地域社会の特徴を捉えようとした。今日に至るまでコミュニティを維持し続けている開拓地の調査を通して明らかになったのは、(1)共同性が変容を余儀なくされる際のリスクの抑制、(2)ローカルなレベルでの政策担当者の働きかけ、(3)継承における記憶・体験の存在とそれらの共有のための場の存在の重要性である。

研究成果の概要（英文）：This research, following formation and transformation of community in Post-war Reclamation, examines the significances which prescribe the sequences of process. Specifically, it tried to catch the feature of the local community different from 'natural village' through analysis of the building processes of cooperation, the states of opposition and conflict, the ways to solve them, the influences of Reclamation policies, and the succession during the generation. The research in the clearances keeping communities up to now shows (1)Restraint of risk with change in a cooperation,(2)Approach of the public functionaries in charge by the local level,(3)Importance of the existence of memories, experiences, and common places to have them.

研究分野：社会学

キーワード：戦後開拓　コミュニティ　地域社会学　家族　世代　ライフコース　継承

１．研究開始当初の背景

戦後開拓地の成立と展開をめぐる社会学的な研究は、以下の三つの視点から蓄積されてきた。

第一は、戦前・戦時期の旧満州および樺太への開拓団の人びとの戦後の生活体験である。その一例として、蘭（1988）の研究は、満州開拓団を母体とした開拓集落を事例に、開拓集団の「共同性」のありようを分析したものである。そこではコミュニティの維持において(1)満州での「共同体験」によって培われた“きずな”、(2)元開拓団団長のリーダーシップ、といった要素に加えて(3)開拓共同体の開拓後に再編された「シンボル共有体」が果たした役割の大きさが示されている。

第二に、第一の点と関連して、開拓団や旧植民地からの引き揚げという観点からの研究も蓄積されている。道場（2008）や安岡（2011）の研究は、過剰人口として送り出された人びとがいかにして再び収容されていったのかについて明らかにしている。

第三に、開拓者たちの経験からとその独特の位置から、「日本農民」のあり方を問い直す試みも行われている。道場（2002）の研究は、（再）開発に直面した開拓地の人びとが農民闘争へと向かっていく過程を描き出している。

これらの研究はそれぞれ重要な知見を提示しているものの、戦後日本社会における「過剰人口問題」のトータルな構造との関連づけについては十分な分析が行われているとはいえない。それは社会学における戦後開拓地研究が、主として引き揚げ問題との関わりにおいて行われてきたことに起因している。引き揚げ者によって形成された戦後開拓地への焦点化は、ひとつの戦後社会のありようを描き出しているものの、特定事例から一般化へという課題が残されている。その後も戦後開拓地の成立・展開過程の多様性に関する研究は蓄積されないまま、今日に至っている。

それゆえに、第一に、研究視角の問題として、復員兵とその家族、都市に戻ることができない戦災罹災者、農家の非あととりの青少年といった、引き揚げ者以外の開拓者たちが、いかにしてコミュニティを形成していったのかについての考察が捨象されることになった。このことは、従来の研究が主として対象としてきた、引き揚げとの連続性に基づく凝集性をもった集団としてのコミュニティとは異なり、多様な属性をもつ人びとによって形成された戦後開拓地のコミュニティにおける対立や葛藤についての視点を欠くことにつながっている。

第二に、方法上の問題として、対象事例における体験やライフコースを対象とした実証分析と、農業史研究などが対象としてきたような戦後の開拓政策および一般農政に関する文書資料についての分析とが、相互に接合されることが少なかったために、コミュニティの変容とそれを促したものとを関連づけて分析するうえでの制約を抱えている。

第三に、従来の戦後開拓地研究は入植者の第一世代を対象としており、世代という視点を欠いてきた。そのために世代間継承をめぐって生じるコミュニティの維持や分解の過程は十分に明らかにされていないのが現状である。以上のような状況をかんがみ、新たな視点を設定し、戦後開拓地のコミュニティの形成と変容の過程を丹念に再構成することにより、既存の研究の限界を打開することを指向するに至った。

２．研究の目的

本研究は、従来の社会学・経済学・人文地理学・農業史などの研究において見落とされてきた、戦後開拓地におけるコミュニティの形成と変容に注目し、次の三つの視点に基づき、戦後日本の社会変動に関する新たな研究領域の開拓を指向する試みである。

第一に、戦後開拓地を、その成立の経緯（成員の属性や入植者の募集形態など）に基づいて類型化し、それぞれにみられる特徴について分析する。青森県の戦後開拓地をフィールドとした髙瀬・村上（2011）は、多様な属性をもつ人びとによって形成された開拓地において、そのカテゴリーに基づいた対立が生じていたことを明らかにしている。そうしたコミュニティの成立の経緯の特性が、その後の展開にどのように影響していったのかを把握する。

第二に、1945 年 11 月に施行された「緊急開拓実施要領」を嚆矢とする戦後開拓政策の形成過程を、中央の農業行政、地方農政双方の視点から分析する。とりわけ後者に関しては、各道府県の農業史や開拓地で編纂された地域史のなかではその特徴や主導した人物の影響が語られているにもかかわらず、既存の研究は中央農政の動向を主な対象として行われてきた。本研究では、そうした一連の諸施策が、農業経営のみならずコミュニティの形成や維持に対してどの程度の影響力をもっていたのか（あるいはもたなかったのか）について、実証的に明らかにする。

第三に、世代間の継承によって生じるコミュニティの変化について検討する。これまでに予備的に実施した聞き取り調査からは、多様な属性をもつ第一世代から、学校生活などの共通体験をもつ第二世代への移行によって、コミュニティの人間関係に変化が生じたことが明らかになっている。自らの土地を所有することへの意味づけについても世代間の相違がみられ、これらもコミュニティのありようを規定する要素と考えられる。こうした文書資料には表れない世代ごとのコミュニティ体験について、聞き取り調査などを通じて分析する。

以上の作業を通じて、戦後開拓地が経験した変化と、開拓行政や世代といった要素の相互的な影響関係を明らかにする。

【引用・参照文献】
・蘭信三,1988,「満州開拓団を母体とする戦後開拓集落における「共同性」」『ソシオロジ』33-1。
・大竹晴佳,2009,「野原地区における開拓の展開」『新見公立短期大学紀要』29-2。
・戦後開拓史編纂委員会編,1967,『戦後開拓史』全国開拓農業協同組合連合会。
・髙瀬雅弘・村上亜弥,2011,「戦後開拓地のライフヒストリー(1)」『弘前大学教育学部紀要』105。
・野添憲治,1976,『開拓農民の記録』NHK ブッ　クス。
・原田由起乃,1998,「戦後開拓地における集団の組織化と変容」『人文地理』50-1。
・道場親信,2002,「戦後開拓と農民闘争」『現代思想』30-13。
・道場親信,2008,「「戦後開拓」再考」『歴史学　研究』846。
・三好豊,2008,「戦後高冷開拓地におけるリーダーのライフ・ヒストリーの分析」『農業史研究』42。
・安岡健一,2011,「戦後開拓と戦後海外農業移民」蘭信三編『帝国崩壊とひとの再移動』勉誠出版所収。

３．研究の方法

(1)先行研究の収集と検討

社会学、経済学、人文地理学、農業史領域での、戦後開拓に関する諸政策や事例調査に基づく先行研究を網羅的に収集し、批判的に検討した。加えて日本における地域社会研究の成果をふまえ、これまでに分厚く蓄積されてきた農村社会研究にみられるコミュニティの特徴と、戦後開拓地との共通点、ならびに相違点を整理し、本研究が既存の研究に対して提起しうる新たな視座の明確化を行った。さらに戦後開拓地に関する先行研究に加え、一般農政に関する制度・政策や調査に基づく研究についても、文献収集を行った。

(2)基本的資料の収集と整理

研究の前提となるマクロな社会変動を把握するために、以下のような全国レベルのデータ・資料を収集した。

①『国勢調査報告』（全国・都道府県別）などの統計資料
②開拓行政・一般農政に関する諸資料（法規・通達類・各種審議会資料など）
③開拓地にみられる諸問題に関する単行本・新聞・雑誌（『開拓』『農地』誌など）記事

(3)資料・データ収集調査

研究機関において、以下の資料収集を実施した（括弧内は資料所蔵機関の所在地を表す）。

①開拓地営農に関する統計資料（東京都、仙台市）
②開拓行政・法規に関する資料（東京都、青森市、盛岡市、千曲市）
③開拓地を対象に実施された調査報告資料（東京都、青森市、仙台市、千曲市）
④開拓記念誌のような形で刊行された地域における回顧的資料（青森市、盛岡市、仙台市、千曲市）
⑤戦後日本人の生活史に関する調査資料（東京都）

(4)生活史調査

青森県鰺ヶ沢町山田野地区（山田野開拓）、同町長平地区（和開開拓）、岩手県滝沢村大石渡地区（柳沢上郷開拓）をフィールドに、戦後開拓者として入植した人びとへの聞き取り調査を実施した。これらの第一世代の人々に、入植開始直後から現代に至るまでのコミュニティの展開過程について、ライフヒストリー・インタビューという形でのインテンシブな調査を実施した。

加えて上記地域の第二世代以降の人びとを対象に、生育歴からコミュニティ体験、職業経歴、地域におけるネットワークの世代間の変化、といった点について、聞き取り調査を実施した。

(5) 収集資料の整理と分析

(3)および(4)の調査で収集した資料について、内容ごとに分類・整理を行ったうえで、大きく分けて以下の三つの分析を行った。

①戦後開拓地の成立過程における土地の選定・入植者の斡旋および選考・入植者の属性に基づいた開拓地の類型化とそれぞれの性格づけ
②聞き取り調査に基づく個人、家族、そしてコミュニティのライフコースの復元と対象地域ごとのパターンや特徴の比較分析
③ライフヒストリー・インタビューを通しての世代ごとのコミュニティ体験の把握と関係性に対する捉え方や評価の比較

４．研究成果

本研究は、戦後日本社会における地域社会の変容を、戦後開拓地という、自然村とは異なる原理のもとに編成された地域のコミュニティに注目し、その形成の経緯や諸政策の影響、世代間継承によって生じる変化を分析することにより、社会変動が地域社会を生み出す過程と、地域社会が社会変動を生み出す過程という２つの次元から明らかにしようとした。

具体的には、以下のような点が明らかになった。

(1)コミュニティにおける葛藤と解決の過程

戦後開拓地は、自然村とは異なった原理で編成された地域社会であり、多様な属性をもつ人々によって形成されたという点からみても、日本の農村社会において特異な存在である。そうした条件のもとでのコミュニティ

の形成と展開過程においていかなる葛藤の位相が表れたのか、またそうした葛藤はどのようにして解決されていったのかについて考察した。ここでは以下の二つの側面に関してその様態を明らかにした。

ひとつは共同性と自立をめぐる位相である。若年層の単身者によって形成された開拓地においては、当初は共同経営という形での開拓が進められたが、やがて分配をめぐる葛藤が生じていく。同時代的な認識（とりわけ外部からの）においては、あたかも「理想的な営農形態」であるかのように捉えられた共同経営は、当事者たちにとっては怠惰な個人の存在を顕在化させるものとして意識されるようになった。そこで行われたのが個人経営の移行である。この動きは、ともすれば「共同体の解体」とも受け止められるものであった。しかし聞き取り調査の対象となった開拓地においては、個人経営の移行と生殖家族の形成のタイミングを重ね合わせることによって、形成されたコミュニティの分解が回避されたと考えられる。加えて当地では「助け合いの組」といった小単位のグループの形成によって、共同から個人へという移行にともなうリスクの抑制措置が取られた。こうした共同性を維持するための工夫が、結果としてコミュニティを今日まで存続させることにつながっていると考えられる。

もうひとつは地域における共同の「場」づくりとその維持をめぐる位相である。入植者たちの多様な背景は、ときに営農実績における格差を生み出し、それが対立感情へとつながることもあった。そうしたなかで、共同の「場」をもつことが、コミュニティを形作るうえで重要な役割を果たしていたことが調査を通して明らかになった。具体的には学校の存在である。戦後開拓地における学校の設置は、請願運動における第一世代のまとまりを、また第二世代においては共通の経験をそれぞれもたらした。それは単なる教育機関というよりも、コミュニティセンターとしての役割をもった存在であった。そうしたシンボルとしての学校は、統廃合によって本来の機能を喪失した後も、集会所として使用されることで、共同の「場」としてあり続けている。このような「場」の存在もまた戦後開拓地におけるコミュニティの維持にとって重要なものであった。

(2)開拓農政とコミュニティ

1945 年 11 月に始まり、約 30 年間にわたって継続した開拓農政は、農業全般における開拓地の特殊性を制度面から浮かび上がらせるものであった。その動向は、営農実績といった経済面はもちろんのこと、開拓地におけるコミュニティのあり方を規定するものでもあった。この点については、以下の二つの点が明らかになった。

ひとつは政策そのものではなく、その実施に携わった県の担当者の人柄といったものの影響力である。とりわけ開拓初期の回顧においては、行政担当者の取り組みに対する感謝の語りが多く見られた。そうした記述は各道府県の『戦後開拓史』においても認めることができるが、聞き取り調査を通じて、当時の担当者がコミュニティ形成の面にも相当な労力を割いていたことが窺えた。

もうひとつは先の点と関連して、営農指導がもたらした効果である。営農指導はもちろん生産性の向上や合理化を進めるために行われたものであるが、それが地域の人々にとっての「教育」の場となることで、まとまりや協調を生む機会となっていたことがたびたび示唆された。この営農指導に関しては、それがもたらした収益性の向上といった側面よりも、そこでの人と人とのつながり（講師との関係はもとより、営農指導の機会を作った地域のリーダーとの関係なども含む）が強調されていた。

もちろん、開拓農政の「ひずみ」が開拓地におけるコミュニティの解体を促進したという側面は否めない。しかしその一方で地方や地域レベルの政策がコミュニティの形成や維持に対して一定の貢献を果たしたことも事実である。

(3)世代間継承における共同性

第一世代の人々が、苦心を重ねた末に形成していったコミュニティのあり方は、第二世代以降の人々にどのように受け止められていったのか。本研究が対象としたのは、現在までコミュニティが維持されている事例であり、これらの分析のみに基づいて世代間の継承のありようを説明することは困難である。また本研究では、第一世代と第二世代の対比に基づく分析が主となっているため、第三世代以下の人々の意識にまで踏み込めてはいないが、次のような特徴をみいだすことができた。

世代間比較を通して、第二世代の独特な位置が明らかになった。ここでは主たる対象が女性に限られているが、その特徴は以下のようなものである。第一に、彼女たちは一般的な世代傾向として、進路選択や結婚に関する相対的な自由を有していた。しかしながら第二に、第二世代においては第一世代の労苦の強い内面化がある。そして第三に、第一世代からみた第二世代には半ば自明のものであった家業の継承が、第二世代から第三世代へという流れのなかでは不透明になっている。このことは、第二世代の人々が、自らの親たちが形成してきたコミュニティの維持に腐心しながら、その多くがコミュニティは自分の代まで、といった意識をもっていることを示している。第一世代の開拓の労苦を目の当たりにし、それが身近なものとなっている第二世代にとって、継承の問題は一般農家以上の拘束性をもっていた。その意味では、第一世代以上に第二世代の人々はこの問題の重さと直面する存在である。

共同性という観点から世代間のつながりをみるとき、そこにはそれを支える要素の存在が認められる。それらは以下の三点にまとめることができる。第一に、世代を越えた開拓の記憶の共有が挙げられる。その際には、単なる口伝だけではなく、様々なモノ（開拓地ごとに編まれた記念誌や記念碑、さらには開拓当初からの遺構など）の存在が重要な役割を果たしている。第二に、女性たちの共同性の継承にみられる特徴として、協同組合のような形で制度化された男性たちの共同性とは異なった、明確なリーダーシップを伴わない形での「やわらかな共同性」の形がある。それは具体的には第一世代の人々が蓄積した生活の知恵の共有といった形で作られていく。第三に、(1)でも言及した点として、共同の「場」の継承がある。開拓地に設立された学校は、廃校後も同時代的な意味では語らいの場であり、歴史的な意味では地域の記憶をとどめる場である。さらには調査を通して、そうした「場」を、コミュニティのなかに内閉させるだけでなく、外側へと開こうとする取り組みにも触れることができた。その意味でもコミュニティ体験にとって共同の「場」が果たした役割は大きい。

農業政策といった観点からみれば、1975 年４月の開拓農政の一般農政への統合によって戦後開拓は終焉したことになる。しかしながら、戦後開拓地におけるコミュニティのあり方に目を向けてみると、「開拓者」たちのアイデンティティは今もなお明確であり、その場所は戦後開拓地であり続けている。このように政策の規定性とは異なった視点、人々のアイデンティティやその基底にある経験と記憶という観点からコミュニティのあり方を捉えようとする点において、本研究はこれまでの研究に対してオリジナルなものであると位置づけることができる。

もっとも、本研究が捉えた戦後開拓地のコミュニティにみられる独自性というものは、すでに数少なくなっている第一世代が去ることによって大きく変容していくことが予想される。まずは第一世代の体験を語りとして記録する作業が喫緊の課題となる。加えて地域ごとに編まれた記念誌や日記といった資料の収集・整理といった作業の必要性もより高まると考えられる。

加えて本研究にとっての新たな課題は、第二世代から第三世代、第四世代への移行および継承問題である。そこでは何が継承され、また何が継承されないのかといった点について、今後フィールド調査を通してより深く分析していく予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2　件）

① 髙瀬　雅弘、戦後開拓地のライフヒストリー（４）―青森県鰺ヶ沢町山田野地区における女性たちの地域性と共同性―、弘前大学教育学部紀要、査読無、113 号、2015、pp.23-36

② 髙瀬　雅弘、戦後開拓地のライフヒストリ　ー（３）―岩手上郷分村における「開拓二世」の女性たちのライフコース―、弘前大学教育学部紀要、査読無、111 号、2014、pp.17-30

〔図書〕（計　2　件）

① 髙瀬　雅弘　他、弘前大学出版会、山田野―陸軍演習場・演習廠舎と跡地の 100 年―、2014、126（55-82）

② 木村　元、髙瀬　雅弘　他、クレス出版、近代日本の人間形成と学校、2013、386（53-69、254-352）

６．研究組織

(1)研究代表者

髙瀬　雅弘（TAKASE, Masahiro）
弘前大学・教育学部・准教授
研究者番号：２０４４７１１３